

学校組織として学力向上へ取り組むヒントが満載

「学力向上フォーラムながの」のポスターセッションにおいて、「木曾町立福島小学校」と「大町市立第一中学校」の2校が実践発表を行いました。来年度の研究推進計画を立てるこの時期だからこそ、他校の取組を参考にしてみませんか。

木曾町立 福島小学校 テーマ：「考える力を高める授業づくり」を目指して

- ◎ 校内研究グループと研修システムの構築
- ◎ 子どもの学びと各職員の指導のよさの共有化

ポイント 校長、教頭、研究主任を核とした充実の学びに向かう職員集団づくり

- ① 課題設定、追究、振り返りに、考えを伝え合う場を位置づける授業づくり
- ② 生活科・総合的な学習の時間の見直しと充実
- ③ 継続的な研究グループと研修システムの構築

目標の設定

成果
A 国語：「読むこと」の指導改善が進んだ
B 社会：地域の方との関わりから学べた
C 特支：個別の指導計画・支援計画の見直しが図れた

目標
A「話すこと・聞くこと」の指導改善と系統性を意識した単元展開
B 総合全体計画の見直しと地域の方との関わりが深まる年間計画
C 一人一人の育ちの違いを生かした個別支援計画

方針・計画 「考える力を高める授業づくり」の実現に向けて

3つの研究グループ設置

- A 国語グループ
- B 生活・総合グループ
- C 特別支援グループ

職員間で研究の方向を確認
授業改善のPDCAサイクル回転

話す・聞く・返事をする
考えを伝え合う授業づくりの実践

郷土学習の位置づけ
学級創造案に年間計画を盛り込む

育ちの違いに合わせた支援を検討
研修で学んだことの共有化

研究主任 職員研修係 教頭先生 による企画研修

木曾町 主催の 企画研修

一人一公開：互いの授業を見合っ授業力の向上を図る

取組の内容 「考える力を高める授業づくり」に向けて、強力・協力推進

職員をつなぐ「研究通信」の発行

学び合う教師のよさの発見

取組のよさ 子どもの育ちの共有化

A 国語グループ
CRT結果から話す・聞くの系統性を意識した指導へ
話す・聞くを軸とした言語活動の充実へ

B 生活・総合グループ
年間計画を全職員で研修・共有
子ども自らが学び場の設定
教師の絶妙な出 学びの足跡提示

C 特別支援グループ
授業のUD化
個を大切にす 支援
授業における タブレットの 活用方法研究

職員研修充実
教頭先生の 道徳系授業 から学ぶ

ALT との研修 特別支援教育 研修会の実施

取組の成果

- 1 学習指導要領を基に、授業を創る面白さを味わう教師集団へ高まってきた
- 2 「先生方のよさ」を共有し、伸ばし、拡げる学校になってきた
- 3 「学びたくて仕方ない」「伝えたくて仕方ない」子どもたちに変わってきた

大町市立 第一中学校 テーマ：自立した学び手となる生徒の育成を目指した【協働の学び】を軸とした授業への取組

「論理的思考力・筋立てて考え気づいたことを正確に伝える力」の高まりから学びの深化へ

ポイント 全教科・全授業で論理的思考力を高める【協働の学び】を軸とした授業の実施

- ① 「本質的な問い」に向かって学ぶ主体的な生徒の育成
- ② 「思考のすべ」（比較する、分類する、関連付ける）を活用する場面設定
- ③ 少人数による職員授業づくり研修（ラーニング・コミュニティ）

目標の設定 【協働の学び】を軸とした授業を始めて3年が経過して…

【成果】 ◆全ての生徒に学ぶ権利を保障できる
◆学習内容の定着が図られにくい生徒の学力を回復できる
◆思考力・判断力を問う問題に強くなる

【目標】【協働の学び】の質を高めるために…

- ① 「本質的な問い」となる魅力的な問い・今日のゴールの設定
- ② 対話活動の保障と「聴く、つなぐ、もどす」指導
- ③ 論理的思考力を高める「3つの思考のすべ」を位置づけた指導構想

方針・計画 「論理的思考力」の高まりを目指すための具体的な手立て

- ① 教科ごとに「教科コンパス」「教科シラバス」を作成
- ② 自立した学び手を育む教育課程の編成（教科横断的な視点）
- ③ 単元を3つのプロセスで構成
- ④ 自立した学習者の構えづくりをねらった学びの集会の実施
- ⑤ 「3つの思考のすべ」を全授業に位置づける

取組の内容

- ① 教科コンパスの作成
「3年間でつける力」
「学び方・協働の学びを活性化させる手立て」
「筋立てて考え気づいたことを正確に伝える場」の設定
教科シラバスの作成
「単元の配列」
「単元の核心」
「本質的な問い」の明記
- ② 自立した学び手を育む教育課程の編成(教科横断的な視点)
- ③ 単元プロセスの構成(数学科の場合)
＜核心をつかむ過程＞
ジャンプ問題につながる共有問題の設定
＜核心への理解を深める過程＞
思考のすべが明確になる発問
＜学びの意味化を図る＞
マインドマップの再構成
- ④ 学びの集会の実施
◆内発的動機を高めるには？
◆なぜ、入試が変わる？
◆現代に求められている学力
◆思考力・判断力・表現力 up
◆メタ認知能力とは？
- ⑤ 3つの思考のすべ
◆比較する
◆分類する
◆関連付ける

取組の成果

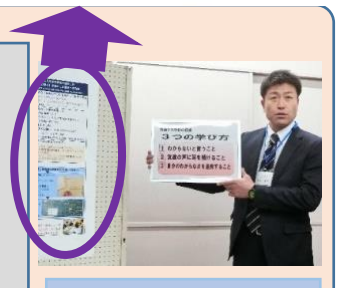
- 1 生徒同士が自然に対話し、互恵的に学び合う関係へ成長している
- 2 生徒が論理的思考力を高め、自立した学び手へと成長しつつある
- 3 ラーニング・コミュニティにより教師が授業力を高めている

両校に共通する【研究推進のポイント】

- ◆学校としてつける力を明確にしています
「考える力」「論理的思考力」
- ◆推進の土台をつくっています
「推進グループ」「教科シラバス」
- ◆共有し継続して取り組んでいます
・ 学び合う教師、子どもの育ちを研究通信で共有
・ 教科コンパス、教科シラバスによる学び方の共有



池内 周己 先生
(研究主任)



矢口 直樹 先生
(研究主任)



【大町市立第一中学校】森川 寛 先生

特徴を比較・関連付けて進化の道筋を見いだしてほしい

動物の生活と生物の変遷「動物の分類」（中学校2学年）

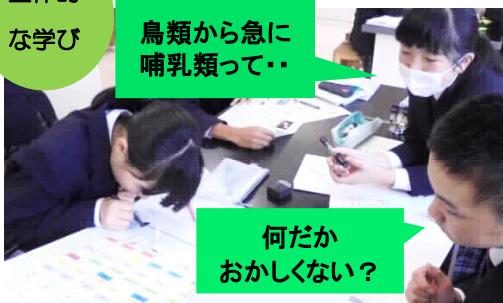
第一中学校は、「協働の学びを軸とした授業」に取り組んでいます。本年度は、「比較する」「分類する」「関連付ける」ことを生徒の思考のすべとして授業改善の視点に置きました。森川先生は、動物の特徴を示したカードを比較・関連付ける中で、枝分かれする進化の道筋を、生徒が自ら見いだすことをねらいとしました。

一帯一学

「まずやってみる」そして、「違和感を共有する」中で、疑問をもつ

主体的な学び

鳥類から急に哺乳類って..



何だかおかしくない？

動物は魚類や哺乳類等に分類されることを学んだ生徒は、「進化の道筋の特徴が示されたカード」を並び替えて考えます。カードは〇〇類以外に進化に関わる動物もあります。4班は魚類→両生類→爬虫類→恐竜→始祖鳥→鳥類→単弓類→哺乳類の順に一列に並べました。しばらく眺めていると「あれ？」「変かも」とつぶやきの声の広がりました。鳥類から単弓類の所を示して「何だかおかしくない？」（小さく弱くなっている）というのです。終わったはずの並び替えが再開しました。

主体的に並び替えをした生徒は改めて結果を眺め、疑問をもちました。生徒が自ら疑問をもつことは問題を見いだすという思考力の育成につながります。森川先生は、生徒が最初は枝分かれせず一列に並べると考え、自分たちの活動を見返せるようにすることで、違和感を共有できるようにしました。

子ども理解

いくつかの情報を協働して関連付けながら、科学的に進化の道筋を考える

対話的な学び

単弓類は恐竜っぽいけどちがうんだよ



全部使わない班もあったよ。

一人一人の追究が始まりました。並べられたカードをじっと眺め続ける生徒、森川先生が用意した資料を手にして読みふける生徒、席を立てて他の班の様子を探る生徒等、多様な追究の姿がありました。

Aさんが始祖鳥のカードを手にとると、班の他の生徒はその様子に目を向けます。「飛ぶのをあきらめたのかな」「恐竜ってどうして絶滅したんだっけ」「鳥類から急に哺乳類はないかも」等、考えが交わされました。

事象に対する客観性を高めるには、複数の資料を相互に関連付けることが有効です。森川先生は素材研究から、生徒が考える根拠となる資料を複数用意し、必要に応じて使えるように準備しました。

素材研究

共通性と多様性の見方・比較する考え方（理科の見方・考え方）を働かせ、結論を出す

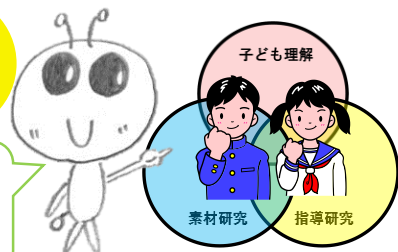
深い学び



Aさんは、「恐竜→始祖鳥→鳥類」のカードをまとめて手に取り、「これはセットだね」と言い、「単弓類→爬虫類」のカードと分けました。そして、恐竜と単弓類の共通する特徴を基に「これで解消！」と言いながら、爬虫類から2つに分かれる道筋に並び替えました。生徒同士、「うん」「いいかも」等の声の交わされました。森川先生は、「途中から分かれるんだね」「特徴を比べて考えられていたね」と声をかけました。

生徒が共通性と多様性の視点から資料の情報を関連付けて理解することは深い理解になります。森川先生はグループ活動を通して生徒が情報を関連付けて考えられるようにし、そのよさを意味づけました。

指導研究



カードを操作することは「比較する」「分類する」「関連付ける」という思考と結びついていたね。森川先生の「子どもを真ん中にした教材研究」は、生徒自身が協働して探究する姿を生み出しているんだね。



【塩尻市立広丘小学校】 佐々木 緑 先生 対象と関わり遊び込むことで気づきを大切にしたい

1学年「水をつかって
たのしくあそぼう」

佐々木先生は今までの子どもたちの経験から興味や関心を大切に、水を使った砂遊びを楽しむ中で子どもたちの気づきを生み出す授業を構想しました。

興味や関心から、対象と繰り返し関わる中で願いをもつ

主体的
な学び

水をかけるよ



水路みたいに
流したいな

学校生活に慣れてきた子どもたち。園でやったことのある砂遊びを生活科の時間に行いました。Aくんは最初、砂に直接水をかけていましたが、何度か遊んでいくうちに、「砂山の上の方から水路みたいに水を流したい」と半分に割った竹の棒を山の斜面に置いて水を流していきました。

佐々木先生は子どもたちの興味や関心を大切に、対象と繰り返し関わるようにしていきました。対象と直接関わることで、子どもたちは自分の思いや願いが高まり、それを実現しようとしていきます。このような対象と直接関わる活動が子どもたちの興味や関心を喚起し、主体的な学びにつながっていきます。

子ども
理解

対話的
な学び

対象への働きかけや対象からの働き返しが他者との関わりを生む



池の土手が
崩れちゃうよ

竹の棒から次々に水が流れ込んでくるので池の土手の砂が崩れてしまいます。そこでBくんは、池の底にたまった砂をかき出して土手を盛り上げて固めていきました。「もっと早くかき出さないと土手が崩れてしまう」と、砂を素早くかき出していると近くにいた友だちが集まってきて、一緒に土手作りをしていました。



もっと早く砂を
かき出そう！

子どもたちが自分の思いや願いに向けた活動をしていく中で、池の土手が崩れてしまうという対象からの働き返しに対し、砂を早くかき出して土手を盛り上げるという対象への働きかけをしていました。対象への働きかけや対象からの働き返しという双方向性のある活動が、自然に他者との関わりを生み出す。協働的に活動していくことが対話的な学びにつながっていきます。

指導
研究

深い
学び

身近な生活に関わる「見方・考え方」を生かした学習活動が気づきの質を高める



竹から水が
こぼれちゃうよ

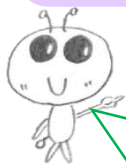


こうすると
こぼれないね

じょうろの水を横から流すと、竹から水がこぼれてしまうことを見つけたAくん。Aくんは、【じょうろと竹の向きから、竹への水の流し方を比べる】という見方・考え方を生かし、水がこぼれないように試行錯誤していきました。そして、じょうろの先を竹と同じ方向にして水を流せば、水がこぼれないことに気づき、水を流すことを楽しんでいました。

自分の思いや願いを実現していく過程において、一人一人の子どもが試行錯誤する中で、自分との関わりで対象を捉えていくことが生活科の特質です。佐々木先生は、子どもたちの姿を大切に環境の構成をしたり、砂遊びを存分にできる時間を確保したりしていきました。身近な生活に関わる「見方・考え方」を生かした学習活動が充実していくことで、気づきの質が高まり、深い学びが実現するようになります。

素材
研究



遊び込む中で遊び自体の面白さや不思議さを感じたり、気づきの質を高めたりすることが大切だね。
子どもの遊びの履歴の把握やそれを基にした環境の構成といった、佐々木先生の「子どもを真ん中にした教材研究」の成果が、気づきの質が高まった姿につながったよ。

単元の終わりには、「自分たちのお砂場ランドで他のクラスの人や年長さんと遊びたい」というように活動が広がりました。

【池田町立会染小学校】

「児童が意欲的にコミュニケーションをする活動を充実させたい」

「伝えたい」「知りたい」と思って取り組む活動を通して、気持ちを伝え合えた喜びを感じながら英語でやり取りすることができる資質・能力の育成を目指し、授業改善に取り組んでいます。

HRT 臼井 敬子先生 JTE ミドルブルック みどり先生

6学年 Hi, Friends2 Lesson5 “Let’s go to Italy”

主体的な学び

テーマへの興味・関心が高まり、会話活動への意欲が高まる



HRT (Home Room Teacher) の臼井先生と JTE (Japanese Teacher of English) のみどり先生が、「自作のパンフレットを使って、行きたい国を紹介する活動」の会話例をデモンストレーションとして示しました。本時の会話活動を具体的にイメージすることで、児童の「自分の調べた国を早く紹介したい」「たくさんの友達と会話して、気に入った国のパンフレットをもらいたい」という気持ちが高まりました。

他教科とのつながりや児童の興味・関心のある事柄についてよく知っている HRT の強みを生かして、行きたいと思う2つの国を紹介する活動を設定しました。「どんな国を紹介するのかな」「友達はどっちを気に入るかな」というワクワク、ドキドキした気持ちや期待感が、主体的な学びにつながります。

子ども理解

対話的な学び

教師とのやり取りや友の気付き等から、コミュニケーション活動の見通しをもつ



デモンストレーションの後、臼井先生は「先生たちは、どんな英語を使っていたかな？」と問いかけます。児童は「nice とか反応する言葉を使っていた」「相手の話に頷いたり、相づちをしたりしていた」と答え、キーセンテンスの“I want to ～”以外の既習表現を使用していたことに注目しました。その後の会話活動では、相づちをしながら聞いたり、good, nice, great 等を使って感想を伝えたりすることができました。

コミュニケーション活動の目的は、英文の一部を変えて行うパターン練習ではなく、互いの思い・考え・気持ちや事実・情報等を伝え合うことです。臼井先生とみどり先生は、既習表現を使えば気持ちや感想を伝えることができることを、デモンストレーションを通して気付かせ、活動の見通しをもたせました。

指導研究

深い学び

思考しながら繰り返して英語を使い、考えや気持ちをやり取りする力を付ける



アメリカを紹介した時に、友達に「全部 big ばかりだね。」と日本語で感想を言われた児童が、ちょっとだけ考え込んで“America is all big.”と既習の表現を駆使して即興的に作った英文を付け加えました。その後、自分がアメリカを紹介された場面では“Yes, yes. America is all big.”と同様の表現を用いて、ジェスチャーを交えて英語で感想を伝えました。

臼井先生とみどり先生は「本時で学んでいる表現は、これから先のどの学習につながっていくか」という視点をもって指導に臨まれています。「既習内容」と「伝えたいこと」を結び付けて英語を使用すること、そして、そのような経験を繰り返すことが、児童がより深く英語を理解することにつながります。英語を使って、考えや気持ちを伝え合う等の言語活動を繰り返し行い、目的・場面・状況に応じて、児童が英語を使用することのできる資質・能力を高めていくことが大切です。

素材研究



子どもの「伝えたいこと」と「既習内容」を結び付けた指導をするためには「子どもが興味・関心をもつ題材設定」と「子どもを真ん中にした教材研究」が大事だね。